

3月不要不急以外は外出しないで手洗いの励行でしようか…2月TVドラマで「人の心の傷を癒すこと」をみた。精神科医 安克昌先生の同名の本をていねいにドラマ化した。阪神淡路大震災の中で、自らも被災しながら精神医療活動に奔走したそのドラマ。最終話「心のケアって何か分かった…一人ぼっちにさせへんことや」という言葉が胸につきささった。人は人の中でしか癒されない。深く納得したドラマでした。

～日本の医療・介護の諸問題の最上流には「地域の人間関係の希薄化・孤立化」がある～

■この本を読んでいるうちに、何人もの患者さんの顔が浮かびました。10年以上前のことです。80代女性。体格もよく、身なりはすっきりして、お金にも困っていません。大家族で長男夫婦と同居、孫もいていつもにぎやか。しかし外来では、食欲がない、眠れないと、いつも同じ話を繰り返します。検査などでは異常なく、悪性腫瘍を疑う所見はありませんでした。しばらく頻回に点滴に通院していましたが、いつのまにか来なくなっていました。あるとき、新聞のお悔やみ欄に職員が発見。あとでわかったことですが、家には帰りたくなかったのです。大きな一軒家の一室が患者さんの居場所、食事は部屋の前に運ばれ、家の中では誰とも口を利かない。帰りたくないから、誰よりも遅くまで点滴を受け、しかしどこにも居場所のない患者さんは、自ら命を絶ちました。

注) 個人が特定されないように表現を変えてあります

■90代の女性です。婚姻歴がなく、働きづめの人生でした。やはり身なりが身綺麗な女性でしたが、体力的に独居が困難となり、施設に入居。しばらくすると食欲がないといいますが、やせて表情は乏しく、元気がありません、衣類も何日前のものか。認知症が始まっていたのです。3度の食事以外は部屋に閉じこもり、一日中テレビ。やがて尿失禁、ケアハウスから、グループホームに入所になりました。しばらくすると、明るく快活な声がひびき、ほっぺが丸くなった患者さんが現れました。昔のように身綺麗な格好で。グループホームでは認知症があっても、それぞれの得意分野の仕事が任せられます。患者さんは料理が得意だったのです。数年前に老衰で旅立たれました。

注) 個人が特定されないように表現を変えてあります



■ 坂井輪診療所 林 一之 氏 『安達先生健康雑記帳』より抜粋～林 一之 氏 <http://niigata-min.or.jp/sakaiwa/>

■20代男性。小児自閉症あり、養護学級を經由し特別支援学校へ。おちつきがなく、会話が成立しません。母親は親の介護をしながら育児を。生活費はなんとかなったものの、不規則な生活と不眠が続き、心身ともに体調不良となりました。しかしわが子を思う気持ちにはひとしばい強く、息子が体調を崩すとすぐ連れてこられました。今息子は成人し、就労支援施設で働いています。月給1万円にも満たないのですが、彼の顔は日に焼け、自信に満ちているように見えました。何を聞いても「はい、わかりました」と応える素直な青年に育っていました。

注) 個人が特定されないように表現を変えてあります

■高齢者でも若者でも、患者さんひとりひとりにはみな物語があります。食欲がない、眠れない、動悸がする、胃腸の具合が悪い、など病気の背景には物語があります。内科医としては器質的な疾患がないか、まず検査をします。原因が判明し内科治療で元気になるればそれでいい、しかし特定の病気が見つからない、また病気が治ったはずなのに症状がとれない、あるいは再発を繰り返す、このような場合、言葉で表現できない、語られてない物語が背景にあると思います。その物語は悲痛であり、人間の根源的な苦しみ、それは「孤立」であることが少なくないと思われれます。もちろん独り暮らしは孤立しやすい、しかし大家族や会社の中においても孤立するところがあります。

裏へ →

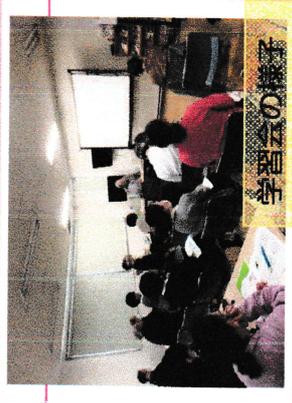


2/26(水)原発「核のゴミ」問題について学習会しました～

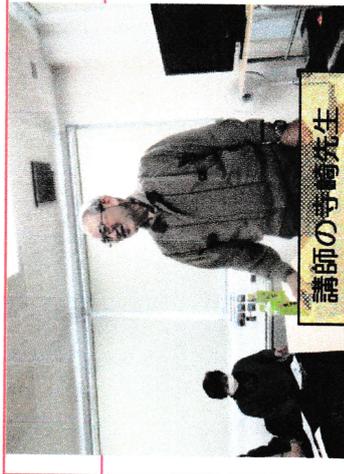
/診療所職員&友の会会員合同学習会

■2月26日診療所2階集會室で、元県立高校理科教諭の寺崎絃一さんを講師に「どうする?核のゴミ」をテーマに学習会を行い、職員・友の会の方々25名の参加がありました。日本の原子力政策の歴史、廃棄物処理方法、核燃料サイクルの仕組みなど学習。

「核のゴミ(使用済み核燃料)」は10万年厳重管理が必要。国地層処分を行うことを決めています。地震大国の日本で地層処分は安全にできるのか、問題は山積。感想より「改めて原発再稼働ストップを切に思った」、「未来の子孫達が新しい技術を見出し無毒化するまでは目の届く地表で管理すべき」などがありました



学習会の様子



講師の寺崎先生

よってけて～ご案内

期日/3月18日(水)

ご案内しました
水都屋艶笑 弥生寄席は中止になりました

お問い合わせ
刈部 268-4854 塚本 283-2475

■診療所よりお知らせ
新型コロナウイルスのため診療所
2F 集會室の使用は3月末まで
使用中止になりました。

3月予定
11日(水)中止
保健委員研修交流集會

→表からの続き～日本の医療介護の諸問題の最上流には「地域の人間関係の希薄化・孤立化」がある～

■「孤立」とは「心の居場所」がないことであり、人と人のつながりが失われ、自己肯定感が失われた状態です。どんな薬を処方しようが効かない。医者は無力です。人は、人と人のつながりの中でしか自己肯定感を保てない、弱い存在です。自分から積極的に他者を求め、人間関係をつくっていくべきではない。著書はたくさんの実例をもとに、どこかの地域でもできるヒントを与えてくれます。「社会的処方」を日本で「文化していく」 そのために問題意識を共有できる市民をつなぎ、地域の宝を育てていく、この方向性は「さかいわ健康友の会」が目指す方向と重なるものだと思います。

「独り暮らしでもひとりぼっちではない」
こんな地域をつくっていくこうと問題意識を共有できれば、きつとだれもが、年をとっても住み慣れた地域で暮らしているのではないかと思えます。

■西智弘氏の著書をご一読いただければと思えます。



サークルご案内

- 編物 毎週水曜 Pm ボラン茶
- 縫い物 毎週火曜 Am ボラン茶
- 絵手紙 毎月第1・3木曜 Am ボラン茶
- ウクレレ 毎週木曜 14時 ボラン茶
- 習字 毎月第2・4月曜 Pm ボラン茶
- 地域の茶の間 “よってけ亭”
- 毎月第1・3水曜 Am ボラン茶
- フラダンス毎月第1・3火曜 Pm 小戸田事務所
- 毎月第2火曜 Pm 診療所 2F
- 山の会 低山を平均毎月1回の日帰り山行